

大学の国際交流プログラムにおける認知リスクの定量的評価

1170424 合田久美子

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

女性 87.05 歳、男性 80.79 歳。これは厚生労働省が発表した 2015 年の日本人の平均寿命である。平均寿命は毎年伸び続け、私たちは寿命が 100 歳を超えるような時代に突入している。そんな新しい時代を幸せに、より良く生きるために、大学時代に私たち学生はどのような力を付けるべきなのか。大学時代の四年間の経験は、今後の人生戦略に大きく関わってくるであろう。本研究では、筆者の四年間の体験をベースにして、この課題について考えていく。筆者は、国際交流や海外に興味はあったものの、英語が話せず自信がなかった大学入学直後から、高知工科大学が提供する国内外の国際交流プログラムや、半年間の交換留学を通じ、様々なリスクに直面しながらも、“グローバルコンピテンシー”を高めることができた。そして、来春からはタイ・バンコクに営業所を持つ企業への就職が決まっている。

本研究では、筆者が四年間で体験した国際交流プログラムの中で起こった出来事をリスクマネジメントの観点から、不確かさ認知とグローバル知性の二つの指標を用いて定量的に考察した。その結果、四年間で不確かさを正しく認知する能力、それに対応する能力の二つが向上したこと、また海外体験時の出来事の結果から得た教訓により努力を続けたことがグローバル知性の向上要因になっていることが明らかとなった。

2. 背景

近年、グローバル化と言われているが、筆者が海外に興味を持ったきっかけは、高校三年生の夏休みにテレビでロンドンオリンピックの開会式を見て感動したことだった。初めて、英語を使って外国人と話してみたいと思った。そこで校内にいた ALT 教師と英語で話すことを試みたが、実際何を話したらいいのかかわからない、相手の会話のスピードについていけないかもしれないという不安から、結局話しかけることができなかった。それから大学入学後は国際交流に挑戦すると決意し、高知工科大学に入学してから四年間で国内外の多くの

国際プログラムに参加した。また大学時代にしか経験できないことをしようと思い、三年次の夏から、タイの国立大学で二番目に古い歴史を持つタマサート大学へ交換留学をし、現地のタイ人学生また欧米留学生の多くの友達を作り、充実した半年間を過ごした。そして 2016 年 12 月には、高知工科大学の魅力を海外へ伝える大使、KUT Youth Ambassador 第 2 号に任命された。四年間の経験を通して、自身のグローバルコンピテンシーを高めることができたと考えている。

次に、筆者が高校三年次と、高知工科大学入学後一年次から四年次までに体験した国際プログラムを整理する。

一年次

- KUT ランチアワー参加(4 月)
- 足摺・四万十、留学生といく日本文化研修(9 月)
- 韓国・木浦海洋大学学生の高知工科大学大学祭訪問の際のボランティア(10 月)
- 全日本学生英語プレゼンコンテスト出場(11 月)
- タイ・シンガポール海外研修参加(3 月)

二年次

- YOSAKOI サマースクール参加(8 月)
- 泰日工業大学サマーキャンプ参加(8 月)
- 熊本・大分、留学生といく日本文化研修(2 月)

三年次

- タイ・タマサート大学交換留学(8 月～12 月)

四年次

- KUT タイクラブ・ソクラン祭りのスタッフ(4 月)
- 中国・安徽大学サマーキャンプ参加(7 月)
- ガーナ高校生の高知工科大学訪問の際のボランティア(9 月)
- ジョン万次郎プログラム修了・KUT Youth Ambassador 任命式(12 月)

タイ就職

3. グローバル知性スコア

海外体験時と現在とで、どの程度グローバルコンピテンシーが向上したのかをみる一つの指標として、1997年12月1日のBusinessWeekで提唱されたグローバル知性スコアを参考に考察する。グローバル知性スコアは10項目のそれぞれにおいて、1.とても苦手 2.苦手 3.ふつう 4.得意 5.とても得意の五つのスケールを用いて自分自身を評価する。以下が10個の項目である。

- ① 私は自分の文化を、コミュニケーション、並びに、他人への関係への期待、価値、影響力の面で理解しています。
- ② 誰かが私に別の視点を提供するとき、私はそれに反論するよりむしろ、理解しようとしています。
- ③ 入手可能な情報が不完全であり、結果が予測不可能な状況でも、私は気持ちよく対応できます。
- ④ 私は新しい状況を受け入れ、常に新しい情報や学習の機会を探しています。
- ⑤ 他の文化を持つ人と同じように、私は自分の文化に対する態度と認識をよく理解しています。
- ⑥ 私はいつもほかの国やほかの文化に関する情報を収集し、それから学ぶことを試みています。
- ⑦ 私は、世界中の政府、政治、経済システムの主な相違点を理解しています。
- ⑧ 私は、他の文化を持つ人々の理解を高めるために努力しています。
- ⑨ 私は他の文化を持つ人々と効果的に働くために、私のコミュニケーションスタイルを変えることができます。
- ⑩ 私は、いつ文化の違いが、仕事での協力関係に影響を与えているかを認識することができます。その場合は、状況に応じて、態度や行動を変更します。

10項目において、一年次から現在までのスコアを算出した結果が以下の表である。

表 3-1 海外体験時と現在のグローバル知性スコア

自己評価項目	一年次	二年次	三年次	四年次	現在
1. 私は自分の文化を、コミュニケーション、並びに、他人への関係への期待、価値、影響力の面で理解しています。	2	3	3	4	4
2. 誰かが私に別の視点を提供するとき、私はそれに反論するよりむしろ、理解しようとしています。	3	3	3	3	4
3. 入手可能な情報が不完全であり、結果が予測不可能な状況でも、私は気持ちよく対応できます。	2	2	2	3	4
4. 私は新しい状況を受け入れ、常に新しい情報や学習の機会を探しています。	4	3	4	5	5
5. 他の文化を持つ人と同じように、私は自分の文化に対する態度と認識をよく理解しています。	2	3	3	4	4
6. 私はいつもほかの国やほかの文化に関する情報を収集し、それから学ぶことを試みています。	2	3	3	4	5
7. 私は、世界中の政府、政治、経済システムの主な相違点を理解しています。	1	1	2	3	3
8. 私は、他の文化を持つ人々の理解を高めるために努力しています。	2	2	3	5	5
9. 私は他の文化を持つ人々と効果的に働くために、私のコミュニケーションスタイルを変えることができます。	1	2	2	4	4
10. 私は、いつ文化の違いが、仕事での協力関係に影響を与えているかを認識することができます。その場合は、状況に応じて、態度や行動を変更します。	1	1	2	3	4
スコア合計	20	23	27	38	42

さらに、一年次から現在までのグローバル認知スコアの変化をグラフ化した。

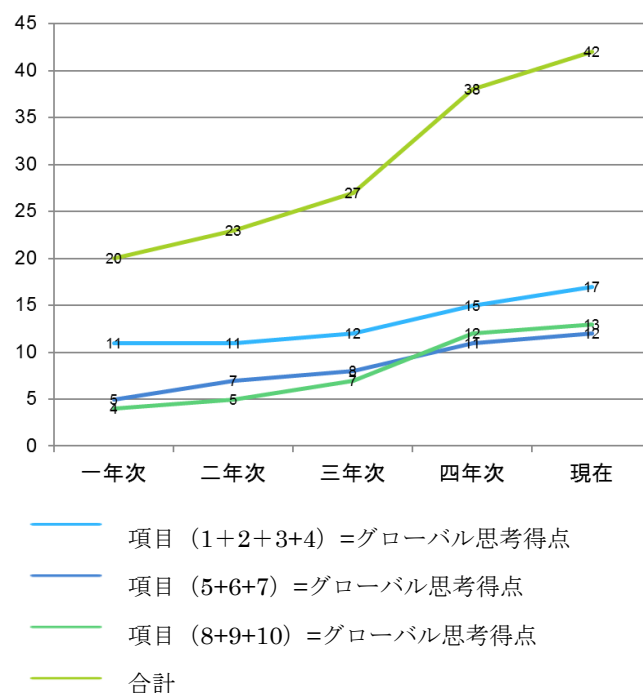


図 3-2 海外体験時と現在のグローバル知性スコアの変化

図 3-2 のグラフからは、三項目のグローバル知性合計スコアは一年次から現在までで上昇しているが、特に三年次から四年次の間に、グローバル業務スキルが大きく上昇していることが見て取れる。これは、タマサート大学留学中に多くの欧米留学生やタイ人学生と関わったことで、異なる文化を持つ人々とコミュニケーションをとる際のスキルを伸ばし、状況に応じて対応できる力がついたからであると考えられる。

4. 研究目的

前節で示したように、確かに四年間でグローバル知性スコアは向上した。しかし、向上のための具体的な方法は自分自身の中でも明確に掴めていなかった。

また、他の日本人学生との会話の中で、海外に対して興味はあるが何をしたらいいのかわからない、言語の不安が大きい、といった声を耳にすることが多かった。筆者自身も大学入学時は海外に興味はあったが、様々な不安(=認知リスク)があり、どうしたらいいのかわからなかった。

さらに 2005 年から 2008 年にかけて世界中で実施された「世界価値観調査」の結果では、自分は冒険やリスクを避けるタイプだと思っている人のパーセンテージが、48 か国中、日本が第一位であった。これは、日本人は世界一リスクを避ける傾向にある国民であるということを示している。

そこで、自身の国際交流体験で認知リスクの変化を分析することは価値があるのではないかと考えた。本研究では、認知リスクをリスクマネジメントの観点から定量的に評価し、グローバルコンペテンシーを高めるための一つの手段を考察することを目的とする。

5. リスクの定義

本研究では、リスクマネジメントガイドライン ISO31000 の観点を参考に、本研究の理解を深めていくために重要な、リスクの定義を確認する。ISO31000 では、リスク (risk) とは、目的に対する不確かの影響であると定義されている。

注記① 影響とは、機体されていることから、好ましい方向及び／又は好ましくない方向に分離することをいう

注記② 目的は、異なったレベルで設定されることがある

注記③ リスクは、起こり得る事象、結果又はこれらの組み合わせについて述べることによって、その特徴を記述されることが多い

注記④ リスクは、ある事象（周辺状況の変化を含む）の結果とその発生の起こりやすさとの組み合わせによって表現されることが多い

注記⑤ 不確かさとは、事象、その結果又はその起こりやすさに関する情報、理解又は知識が、たとえ部分的にでも欠落している状態をいう

出典 ISO 31000:2009 リスクマネジメント解説と適用ガイド

6. 分析手法の提案

本研究ではリスクマネジメントガイドライン ISO31000 を参考に、リスクマネジメントの原理、リスク対応策の種類を示す。ISO31000 の原則では、「リスクマネジメントとは、価値を創造し、保護するものであり、それは、安全衛生、保安、法律及び規制の順守、社会的受容、環境保護、製品品質、統治、世評などの、目的の明確な達成及びパフォーマンスの改善に寄与する。」と述べられている。ここで筆者にとってのリスクマネジメントの価値とは何であるのかについて触れておきたい。筆者にとっての価値は、第一に海外体験を重ねることによって、不確かさに対応できる領域が広がり、グローバルコンペテンシーを高めることができたこと、第二に、日本にいたままでは出会えなかったかけがえのない仲間に出会い、新しい文化を体験しながら四年間で自分自身を成長させることができたことであると考えている。

一般的認識では、リスクマネジメントは、好ましくない影響を小さくするという視点で考えられていたが、ISO31000 では、好ましい影響の増大も、好ましくない影響の増大ともに、組織の価値を生み出しているということを明確に言及している。リスクマネジメントは単なる危機管理ではないということを抑えておきたい。

次に、ISO31000 を参考に四つのリスク対応策を説明する。リスクへの対応は、リスクの大きさとリスクの発生確率に応じて、「回避」「低減」「共有」「保有」の四つに分類される。

回避 リスク回避とは対象リスク事体をなくすことである。現状リスクの低減対策が無く、保有も許されないという状態である。この場合、回避によるほかの影響も考慮する必要がある。本研究では、2015 年 8 月にバンコクでテロが発生した際に、身の安全が脅かされる可能性があった為、発生後バンコクに近づかなかったことがリスク回避対策となった。

低減 リスク低減とは、リスク最適化とも言われる。対象リスク事態の発生確率を下げるか、顕在化した場合の影響の大きさを小さくする管理手法である。本研究では、二回目のタイへの渡航の際にタイ語が話せないことが不安の要素になっていた為、日本語学習中のタイ人学生からタイ語を教わり、現地でコミュニケーションの障害を減らしたことがリスクの低減対策になった。

共有 リスク共有とは、対象リスクにおける被害と外部と分けもつ手法である。最も一般的な手法は、リスク顕在後に保険などによってリスクを移転させることである。本研究では、二回目のタイ渡航の際、引率のスタッフがいなかったことが不安要素であったが、他の学生と二人で参加したことで、リスクの共有を行った。

保有 リスク保有とは、対象リスクを許容してそのままの状態を取り扱う手法である。ここではリスクを保有しているという判断をすることが重要である。本研究では、タイ・シンガポール研修の際に食事や天候で生活・環境に適応できないのではないかという不安があったが、現地で初めてのタイ料理に挑戦し、気温 30 度の中で過ごした。

7. 筆者の四年間の海外経験

ここからは、筆者が4年間に経験した国際交流プログラムと、そのときに起こった出来事をリスクマネジメントの視点から、リスク項目の抽出・考察を行う。

次に、筆者の四年間の国際交流プログラムの中の体験を、時系列順に出来事・目的・不確かさ・影響・対応策・結果・教訓・その後の努力の項目に分類する。前述したように、リスクは、目的に対する不確かさの影響と定義されている。今回の分類における「影響」は筆者の認知リスクであり、「対応策」が認知リスクへの対応である。「目的」、「不確かさ」、「影響」、「対応策」の項目によって、筆者の認知リスクの発生要因・内容・対応を表現することができる。「結果」、「教訓」、「その後の努力」の項目によって、筆者の努力の過程を適切に表現できると考えた。

1. 高校三年次、ALTの先生と英語で話すことを試みた。ここでの目的は、英語の使用であった。そして、相手の話す速度と、何を話したらいいかわからないという会話の話題が不確かさの要素になっていた。その影響として①相手の話が聞き取れないのではないか、②会話が成立しないのではないかという二つがあった。これへの対応策は、結果として話しかけることができなかったので、リスク回避を行ったことになる。話しかけられなかったことが悔しく、この出来事から得られた教訓は、大学では国際交流にチャレンジして、外国人の友達をたくさん作ろうと決意したことである。そして、受験対策として英語学習に力を入れ、無事高知工科大学に入学すること

ができた。

2. 高知工科大学に入学してすぐ、KUT ランチアワーに参加した。KUT ランチアワーとは、月に一回お昼休みに留学生と日本人学生と一緒に昼食を食べながら交流を楽しむというもので、当時、外国人の友達が欲しかった私は、日本人の友達を誘って参加した。ここでの目的は、英語の使用、外国人の友人・人脈の形成である。参加にあたって不確かさの要素になっていたことは、相手の話す速度、相手の国に関する話題、そして参加者である。不確かさの影響として①相手の話が聞き取れないのではないかと、②会話が成立しないのではないかと、③知り合いがいないのではないかと、ということの三つがあった。この三つのリスクへの対応策は、隣に偶然座ったミャンマー人の留学生と話したことであった。これは、これらの三つのリスクを受け入れた行動と言えるので、保有対策と解釈することができる。その結果、聴解はできたが上手く話すことはできなかった。しかし初めて外国人の友達を作ることができた。この結果から、スピーキング力をさらに高める必要があること、相手は会話を理解しようとしてくれることがわかり、その後の努力として留学生との積極的な交流と英語科目の履修で英語学習に力を入れた。
3. 大学一年次の秋に、留学生と行く日本文化研修に参加し、多くの留学生と一緒に足摺・四万十旅行を楽しんだ。この旅行の参加目的は英語の使用、新しい人脈形成であり、相手の話す速度、相手の国に関する話題、そして参加者が不確かさの要素になっていた。不確かさの影響として①相手の会話が聞き取れないのではないかと、②知り合いがいないのではないかと、の二つがあった。これらの不安要素はあったが、そのまま参加した。この行動もまたリスク保有対策と言える。その結果多くのタイ人学生と話すことができ、さらに会話の相手の国への理解が深まれば交流が上手くいくという教訓が得られた。それがタイへの興味につながり、その後の努力としてタイ人留学生のパーティーへの参加、英語学習を行った。
4. 大学一年次の春、タイ・シンガポール海外研修へ参加した。これは私にとって初めての海外渡航であった。参加目的に英語力の向上、学修へのモチベーション向上、新しい友人・人脈形成を設定した。ここで不確かさの要素

となっていたことは、安全性と生活・環境である。その影響として、①初の海外渡航で安全性が脅かされるのではないかと、②2014年にバンコクで発生した大規模反政府デモによって安全性が脅かされるのではないかと、③食事や天候で生活や環境へ適応できないのではないかと、という三つがあった。これに対し、外出時はタイ人学生と一緒に行動する、また危険な場所や夜間の外出は避けるというリスク低減対策をとった。タイ料理は初めてであったが挑戦し、また気温30度の中でも過ごした。これは、二つのリスク保有対策を行ったことになる。その結果、危険な目に遭うことなく無事に研修を終えることができた。また、タイ料理が好物になった。しかし、屋内と屋外の温度差が激しかったので屋外での観光の際、暑さによって体調を崩した。そこから、危機管理情報を定期的に収集することが重要であること、体温調節が容易にできる服装をする必要があることを教訓として学んだ。さらに海外に対する情報収集、研修で学修に対するモチベーションが高まり、英語学習により力を入れた。

5. 大学二年次の夏休み、泰日工業大学のサマーキャンプに参加した。目的は、タイ・シンガポール研修でタイへの興味がさらに高まったことによってタイ文化、生活をさらに体験することと、新しい友人・人脈形成であった。ここでの不確かさは、安全性とタイ語であり、その影響として①引率なしで学生だけでの参加で安全性が脅かされるのではないかと、②タイ語がわからないのでコミュニケーションに障害が出るのではないかと、という二点があった。第一の影響に対しては、工科大からの参加者と一緒に渡航することとした。これは、学生とのリスク共有対策に相当すると考えられる。第二の影響に対しては、日本語学習中のタイ人学生からタイ語を教えてもらうというリスク低減対策を採った。その結果、問題なく現地空港でスタッフと合流することができ、さらに覚えた簡単なタイ語を積極的に現地で使用することができた。ここでの教訓は、引率なしでの渡航に対する不安はリスクの過大評価であったこと、また語学による障害をさらに減らすことができればコミュニケーションが上手くいくということである。そして、その後は工科大のタイ人留学生にタイ語を教えてもらい、タイに関する情報収集を行った。さらに英語学習にも力を入れた。

6. 大学三年次の夏から、タイのタマサート大学で半年間の科目履修を経験した。留学では、海外生活の体験、新しい友達・人間関係の形成、英語・タイ語力の向上という三つを目的に設定した。これに対しての不確かさは、文化・生活、国に対する理解、安全性、タイ語の四つであった。その影響は、①海外渡航経験はあるが、生活をしたことはなかったので、初の海外生活で文化・生活へ適応できないのではないかと、②タイ人学生のほかにも、タマサート大学には欧米留学生がたくさん在籍しており、欧米文化に慣れていなかったため彼らと仲良くなれないのではないかと、③2015年8月にバンコクで発生したテロにより安全が脅かされるのではないかと、④タイ語しか通じない場所でコミュニケーションができないのではないかと、という四つであった。第一のリスクに対しては、タイ人バディーに生活の面で助けてもらうというリスク保有対策を採った。第二のリスクに対しては、欧米人留学生との文化の違いや語学力の差で悩んだとき、自分から彼らを避けてしまったことがあった。ただし、アジア人研究生と一緒に過ごし、少しずつ語学力を付けていくことも行った。これらの行動は、リスク回避+リスク低減対策ととらえることができる。第三のリスクに対しては、テロ発生時はたまたまバンコクにはいなかった。これは、リスク保有対策に相当する。第四のリスクに対しては、タイ語のクラスを履修し、日常的に自ら進んでタイ語を勉強しながら使用したためリスク低減対策を行った。その結果、タイの生活に徐々に慣れていき、アジア人研究生と英語でコミュニケーションを続けたおかげで英語力が付き、欧米人たちとも仲良くなることができた。また、テロ発生後バンコクに近づかなかったことで危険な目に遭うことはなく、タイ語を学んだことにより、学外でも地元の人と話せるようになった。ここから得られた教訓として、異文化コミュニケーションにおいて壁をつくっていたのは自分だったこと、それはリスクの過大評価であり、正しくリスク対策をとることにより低減できること、ただし、テロに対するリスクを過小評価していたこと、が挙げられる。さらにその後の努力として、留学中にできた友達と積極的にSNSで連絡を取り合い、また留学中に伸びた語学力を帰国後もさらに向上させたいと思い、国際交流会館に入居した。そして、

7. KUT ソンクランフェスティバルへスタッフとして参加するなど、タイ人留学生との交流によってタイ語の学習にも力を入れた。
8. 大学四年次の夏に、中国・安徽大学で開催されたサマーキャンプに参加した。この参加の目的は、中国文化・生活の体験と新たな友人・人脈の形成であった。不確かさの要素としては、渡航前は、①中国語（中国語が全く分からない状態で渡航したため）、渡航後は②プログラムの内容（二週間のサマープログラム中に、予定されていたプログラムの変更が何度も発生したため）、事前に知らされていなかった自国文化の披露を頼まれた際には、③外国人の日本文化の受容性（自分が日本文化を披露することによって外国人参加者がどの程度受け入れてくれるか）、が挙げられた。これに対する影響は、①中国語がわからないのでコミュニケーションに障害がでるのではないか、②プログラムの変更により混乱するのではないか、③自国文化の披露で何をしたらよいかわからず、また何かしても失敗するのではないか、の三つであった。第一のリスクへの対策としては、日本語学習中の中国人ボランティア学生に助けてもらい、中国語を彼女から教えてもらった。これは、リスク保有対策＋リスク低減対策の二つを行ったことになる。第二のリスクへの対策としては、中国人ボランティア学生にプログラムの変更がおこってもついていけるよう助けてもらうリスク保有＋低減対策を

採った。ただし、第三のリスクに対しては、自国文化の披露準備をしていなかった為、何もすることができなかった。これはリスク回避対策である。また、それぞれの対応策の結果、中国語が話せないことは大きな不安要素であったが、中国人学生のおかげでコミュニケーションをうまく行うことができた。また他国参加者とは主に英語で会話をし、ルームメイトとして一緒に二週間をすごしたウクライナ人の女性とは非常に打ち解けることができたと感じている。プログラムの急な変更に対しては、筆者は強い違和感を覚えた。しかし周りの参加学生はそのような様子はなく、ストレスを感じていたのは日本人参加者の筆者一人だけだったのかもしれない。また、日本文化の披露として歌やダンスをしてくれないかと頼まれたが、失敗を恐れ、文化披露をすることはできなかった。そして、ここから得られた教訓は、なぜ予定変更に対して日本人の筆者だけがストレスを感じたのか、その理由を知るべきであり、また自国の文化を相手に伝える手段を持つべきであるという二点である。そこで帰国後、ホフステードの多文化世界を勉強し、国によって不確実性回避傾向の強さが違うことを理解した。また国際交流会館に居住する中国人留学生と頻繁に話すようになった。

表 7-1 リスク項目抽出・分析①

プログラム (国)	目的	不確かさ	影響	対応策	結果	教訓	その後の 努力
タイ・シンガポール海外研修(タイ・シンガポール)	英語力の向上 学修へのモチベーション向上 新しい友人・人脈形成	安全性 生活、環境	1. 初の海外渡航で安全性が脅かされるのでは 2. バンコクで発生した大規模デモによって安全性が脅かされるのでは 3. 食事や天候で生活や環境へ適応できないのでは	低減 : 外出時はタイ人学生と一緒に、危険な場所や夜間の外出は避ける 保有 : 初めてのタイ料理に挑戦し、気温30度の中で過ごした	危険な目に遭うことなく無事に研修を終えることができた 本格的なタイ料理を食べたことはなかったが、それから大好物になった 屋内と屋外の温度差が激しかった	危機管理情報を定期的に収集することが大切 研修を通して学修へのモチベーション向上 体温調節が容易にできる服装をする必要有	英語学習 国に対する知識、情報収集
泰日工業大学サマーキャンプへの参加(タイ)	タイ文化、生活の体験 新しい友人・人脈形成	安全性 タイ語	1. 引率なしで学生だけの参加で安全性が脅かされるのでは 2. タイ語がわからないのでコミュニケーションに問題が出るのでは	共有 : 工科大からの参加者と一緒に学生だけで渡航 低減 : 日本語学習中のタイ人学生からタイ語を教わった	問題なく現地空港でスタッフと合流 覚えた簡単なタイ語を積極的に現地で使用した	引率なしでの渡航に対する不安はリスクの過大評価 語学による障害をさらに減らす必要有	タイに関する情報収集、タイ語学習

表 7-2 リスク項目抽出・分析②

プログラム (国)	目的	不確かさ	影響	対応策	結果	教訓	その後の努力
ALTの先生 と英語で話 すことを試 みた(日本)	英語の 使用	相手の話す 速度 会話の話題	1. 聞き取れない のでは 2. 会話が成立し ないのでは	回避 :話しか けることがで きなかった	話しかけられ なかったこと が悔しい	大学入学後は国 際交流に力を入 れると決意	英語学習(受験対策 としての)に力を入 れた
KUTランチ アワー(日 本)	英語の 使用 外国人 の友人・ 人脈形 成	相手の話す 速度 相手の国に 関する話題 参加者	1. 聞き取れない のでは 2. 会話が成立し ないのでは 3. 知り合いがい ないのでは	保有 :隣に 座ったミャン マー人に話し かける	聴解はできた うまく話すこと はできなかった ミャンマー人 留学生と友達 になった	スピーキング力 をさらに高める必 要有 うまく話せなく ても相手は理解し ようとしてくれる	留学生との交流情報 収集 留学生の友達と日常 的に会話 英語学習
留学生と行 く日本文化 研修(日本)	英語の 使用 外国人 の友人・ 人脈形 成	相手の話す 速度 相手の国に 関する話題 参加者	1. 聞き取れない のでは 2. 会話が成立し ないのでは 3. 知り合いがい ないのでは	保有 :積極的 に話しかける	タイ人学生と 友達になった	会話相手の国へ の理解が深けれ ば、交流がうまく いく → タイへの興味	タイ人留学生のパー ティーに参加 英語学習

表 7-3 リスク項目抽出・分析③

プログラ ム(国)	目的	不確かさ	影響	対応策	結果	教訓	その後の努 力
タマサート 大学交換 留学(タイ)	海外生 活の体 験 新しい友 人・人間 関係の 形成 英語・タイ 語力の 向上	文化・生 活 国に対す る理解 安全性 タイ語	1. 海外生活で文化・生 活へ適応できない のでは 2. 欧米留学生と仲良 くなれないのでは 3. テロによって安全 が脅かされるのでは 4. タイ語しか通じな い場所でコミュニ ケーションができ ないのでは	保有 :周りのタイ人 学生に助けてもら った 回避+低減 :欧米人 との文化差や英語 力の違いに苦し んだとき、アジア 人研究生と一緒 に過ごした 保有 :テロ発生時 はバンコクにい なかった 低減 :タイ語を 勉強した	タイの生活に徐 々に慣れてい った アジア人研究 生のおかげで 欧米人たちと も仲良くなった テロ発生後バン コクに近づけ なかつたので 危険な目に遭 うことはなかつ た 地元の人と話 せるようになった	異文化コミュ ニケーション において、壁を つくっていた のは自分だ った テロに対す るリスクを過 小評価してい た	留学中にでき た友達と積極 的にSNSで 連絡を取り合 う 国際交流会 館に入居した タイ人留 学生とタイ語 学習(タイパ ーティ参加 など)
安徽大学 サマー キャンプ (中国)	中国文 化・生活 の体験 新しい友 人・人脈 形成	中国語 プログラ ムの内容 外国人の 日本文化 の受容性	1. 中国語がわから ないのでコミュニ ケーションに障 害がでるのでは 2. プログラムの変 更により混乱す るのでは 3. 自国文化の披露 で何をしたらよ いかかわらず、 失敗するのでは ないか	保有+低減 :日本 語学習中の中国 人ボランティア 学生に助けて もらった 保有+低減 :中国 人ボランティア の学生に助けて もらった 回避 :自国文化 の披露の準備を していなかつた	中国人学生のお かげでコミュニ ケーションをう まく行うことが できた 強い違和感とス トレスを感じ た 文化披露ができ なかつた	不確実性 回避文化の 国別の違いを 理解すべき 自国の文化を 相手に伝える 手段を持っ ておくべき	ホフステード の多文化世界 を勉強した 中国人留 学生と寮で話 すようになった

8. 不確かさ認知

以上の七つの出来事とそのとき起こった出来事の好ましくない結果に着目し、リスクマネジメントガイドライン

ISO31000 を参考に、発生確率と影響規模によって不確かさの認知マップを作成した。

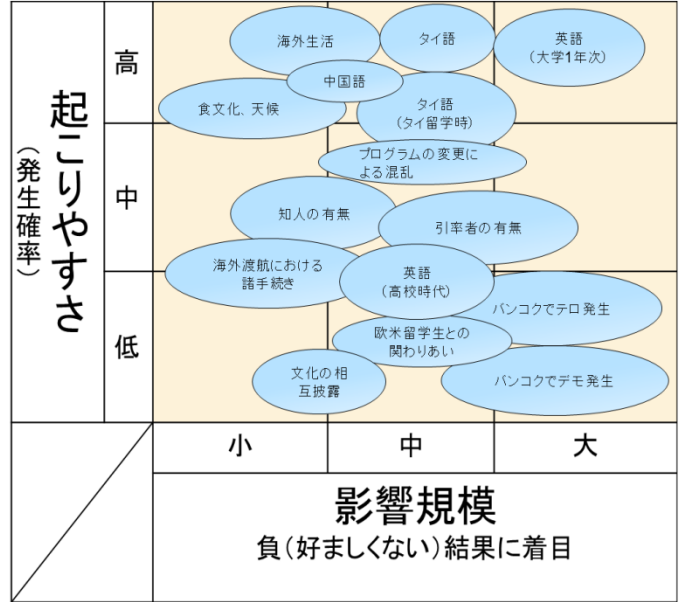


図 8-1 海外体験時の不確かさ認知マップ

また、現在、海外体験時に起こった出来事がもう一度起こると想定した不確かさマップは下の図のように表される。

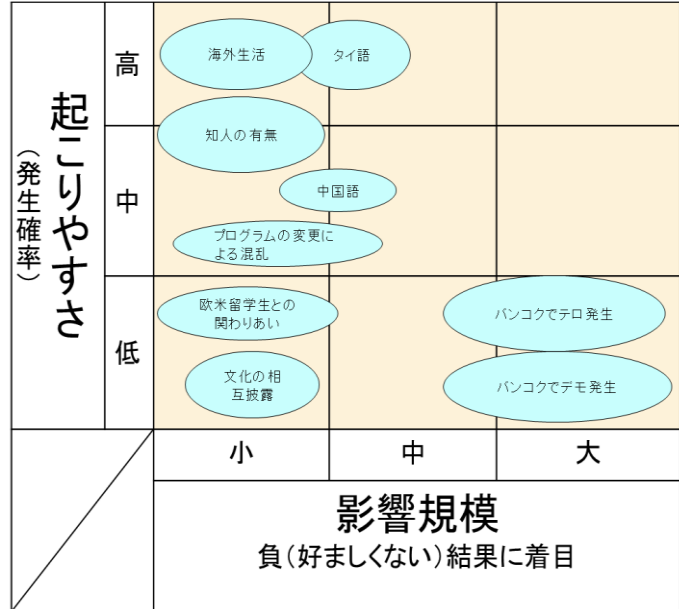


図 8-5 現在の不確かさ認知マップ

次に、四年間の海外体験時と現在の不確かさ認知を比較する。海外体験時に不確かさの要素であった英語、食文化・天候、引率者の有無、海外渡航における諸手続きの四つが、現在では、英語がコミュニケーションの際の障害でなくなったこと、タイ料理が好物になり、天候の差で体調を壊すことがなくなったこと、一人で海外に行けるようになったこと、航空券、ホテル、現地での移動手段などすべて自分で手配できるようになったことにより不確かさの要素から外れ、図 8-5 上ではなくなっている。また、タイ語、知人の有無、欧米留学生との関わりあい、海外生活、文化の相互披露、中国語、プログラムの変更について、現在では低減対策をとれるようになっている。具体的には、タイ人留学生に教わり、簡単な日常会話タイ語を話せるようになったこと、国に対する理解を高めたので、知らない人ばかりでも積極的に話しかけていけるようになったこと、以前よりも欧米文化を理解したこと、海外生活における問題を事前に予測できるようになったこと、日本文化を伝えられる手段をあらかじめ準備すること、中国語を教えてくれる友達ができたと、ホフステードの多文化世界で不確実性に対する考え方の国の違いを理解したことにより、現在では不確かさを低減することができる。

そして、不確かさマップを参考に、海外体験時と現在の不確かさ認知スコアを不確かさ認知スコア＝起りやすさ（0～3）×影響規模（0～3）の方法で算出した。

表 8-6 海外体験時と現在の不確かさ認知スコア

不確かさ項目	海外体験時	現在
英語	9	0
知人の有無	3	2.5
食文化・天候	2.5	0
引率者の有無	5	0
欧米留学生	2	1
海外渡航の諸手続き	1.5	0
タイ語	6	4.5
海外生活	4.5	3
中国語	4.5	3
文化の相互披露	1.5	1
プログラムの変更	4	2
バンコクテロ	3	3
バンコクデモ	3	3
期待値の合計	49.5	23

表 8-6 の結果を元に、海外体験時と現在の不確かさ認知総合スコアの変化をグラフ化したものが下の図である。

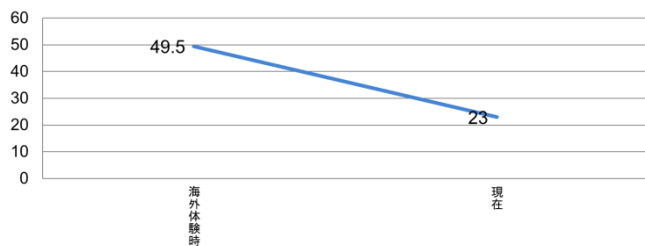


図 8-7 海外体験時と現在の不確かさ認知総合スコアの変化

図 8-7 のグラフは、海外体験時に感じていた不確かさの認知が、現在の不確かさ認知と比較すると半分以上に減少したこと、さらにそれは不確かさを正しく認知し、自身の対応可能領域が四年間で広がったことを示唆している。

9. 考察

自身の海外経験の事例分析と、現在との比較結果から、以下のことが明らかとなった。リスクを取らないことによって悔しい思いをし、その後の努力が次につながっている。また、リスクを取ることによって、当該時点での能力でも、ある程度目的を達成する成功体験を得ることが出来た。

さらに、以下の論点が挙げられる。

第一に、海外体験の中で、能力を高めたいとの動機付けが行われた。自信を持っている分野では能力をさらに高めたいという動機付け、また自信を持っていない分野でも能力を高めたいとの動機付けが生まれた。

第二に、より正確な不確かさの認知を行う能力が向上した。成功体験によって、不確かさの有無・程度を過大に認知していることに気付くことができ、失敗を体験しなくても、それを幸運のおかげと受け止め、不確かさをより正確に認知することを心がけた。

第三に、異なるリスクテイクへの挑戦を行うことができた。成功体験によって、次のプログラムで、異なるリスクを比較的容易にとることができた。

以上三つの能力の向上が、グローバルコンピテンシーの向上につながったのではないかと考える。

10. 結論

本研究は、筆者の海外体験で起こった出来事を、リスクマネジメントの観点から定量的に考察した。そして筆者は、①リスクに対応する能力をさらに高めること、②不確かさを正確に認知すること、③異なるリスクテイクへ挑戦することがグローバルコンピテンシーを高めるための一つの手段として有効だと考える。

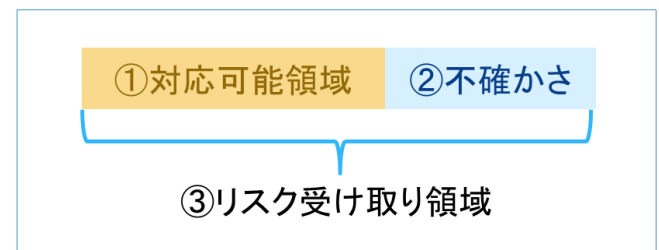


図 10-1 グローバルコンピテンシー向上の提案モデル

11. 参考・引用文献

- リンダ・グラットン/アンドリュー・スコット：LIFE SHIFT 100 年時代の人生戦略, 東洋経済新報社, 2016.
- 山岸俊男/メアリー・C・ブリントン：リスクに背を向ける日本人, 講談社現代新書, 2010.
- 吉川肇子：リスクとつきあう, ゆうひかく撰書, 2000.
- リスクマネジメント規格活用検討会：ISO 31000:2009 リスクマネジメント解説と適用ガイド, 日本規格協会, 2010.

